

讃岐十河氏考察

—永禄元年までの十河氏の動向を探る—

十河氏は讃岐国山田郡十河郷を本貫地とする中世武家である。出自は神櫛王の後裔を称する植田氏の支族とされており、神内氏、三谷氏らを率いる植田党の惣領家として中世末期に戦国大名へと成長した。讃岐国特有の豪族に、寒川氏や三木氏、高松氏などがあるが、彼らも神櫛王の後裔を称し、十河氏と祖を同じくしている。

十河氏が公的文書で最初に検出されるのは、至徳三年（1386年）の南禅寺僧曇周十川郷半済所務職請文であり、これによれば応安四年（1371年）から康暦元年（1379年）まで十河千光が地頭として年貢五十貫文で請け負っているという。因みに、香川県史の記述に基づくと、文永八年（1271年）三月十日の関東下知状で同郷公文職を安堵された源千牛王丸の亡父左衛門尉資光の法名は光念であり、地頭の千光と法名の一字を同じくしているということから、十川郷地頭十河氏は、同郷公文源氏の子孫と推定している。そのため、植田氏の系統とは異なる十河氏が公文職や地頭職などの諸職を世襲しているということとなる。つまり、当時の讃岐国の地頭職に補任された幕府御家人の大半が在郷系御家人ではなく関東御家人であったという事実を考えれば、十川郷地頭十河氏もその一つに過ぎなかったのであろう。

植田氏系図に見られる十河氏の初代は、十河十郎吉保と思われる。同氏は、細川清氏の白山での挙兵に馳せ参じた『南海通記』が記しており、このときに、植田氏から神内氏、三谷氏、十河氏らの一族が分岐したことが同史料や系図においても確認できる。細川清氏の挙兵は康安二年（1363年）であるから、植田系十河氏は同時期に始まったものと考えて差し支えないであろう。したがって、およそ14世紀半ば頃に植田氏の所領である十川郷を分与され、所領支配の拠点である十河城を築城したものと考えられる。

その後の十河氏の活動については、史料上での登場回数が少なくなっているため、具体的な動向については不明である。しかしながら、植田系十河氏が地頭十河氏のように幕府御家人に任命された形跡が認められないために、幕府権力に依らない在地土豪の武士としての活動を図り、早期に国人領主化への道筋を辿っていったものと想定される。細川清氏の死後、細川氏による讃岐国の分国支配の展開は、この頃に派遣された細川氏の被官、安富氏、香川氏の入部によって急速に進められることとなる。彼らは、守護代の地位に就き、入部早々から細川氏権力を背景とした在地支配を強固なものにしていった。そのため、讃岐国の豪族のほとんどが、細川氏の名代である安富氏、香川氏の統制下に再編成されることとなり、讃岐国の歴史は大きな転換点を迎える。大永七年（1527年）には、安富又三郎盛方が守護細川晴元から「摂州表」に十河左介を派遣するように要請を受けている様子に着目すると、細川氏権力が及ぶ16世紀前半までこうした守護体制の運用が讃岐国内で根強く浸透していたことが明らかである。しかし、強固な細川氏権力も16世紀後半を境に阿波三好氏の台頭によって一変することとなる。

十河氏と安富氏、香川氏における決定的な違いは、細川京兆家との結びつきであろう。安富氏、香川氏は、京兆家に仕えることでその地位を安堵された。しかし、この代償として、細川氏の重臣であるために、長期の在京や度重なる軍役の負担という内衆としての役務を果たさなければならなかった。京兆家の軍事力が内衆体制に依存しているという事情から、京兆家の没落と同時に内衆である安富氏、香川氏の影響力も天文年間に無実化していった。一方で十河氏は、14世紀から継続して独立した動きを見せており、京兆家との結びつきは確認できないが、京兆家の守護体制上、安富氏の傘下にあるという位置づけがなされた上で、その実態は阿波細川氏に接近し、国人としての実力を着実に得ていったものと思われる。このことは、後に阿波三好氏の讃岐平定を誘引する引き金となっており、十河氏と三好氏の縁戚関係も従来からの阿波細川氏との結びつきに由来しているのであろう。史料上で不明な15世紀の十河氏の動向はこれによって補わざるを得ない。

16世紀に入ると、京兆家当主細川政元の暗殺や細川氏の内訌で、京兆家の権威は失墜したため、それに伴い守護代安富氏は、有力国人に成長した十河氏や寒川氏らを統制できなくなり、三者間での抗争が東讃を中心に繰り広げられることとなった。大永三年（1523年）には、寒川郡の下道三郷の境界をめぐる寒川氏と安富氏との間で合戦が起きている。同六年には、十河景滋が寒川元政を攻めているが、十河方は阿波から援兵1000余人を得ており、阿波三好氏の介入が確認できる。阿波方の介入は、この後も続き、天文元年（1532年）になると、再び十河氏が寒川領内へと侵入し、合戦沙汰となった。この合戦においても、阿波細川氏の仲介により、両者は和睦し、寒川氏や安富氏も和睦した。しかし、同九年には、寒川氏、安富氏との間で合戦が開始された。この合戦では、寒川氏は劣勢となり、阿波方に救援を求める有り様となった。しかしながら、十河一存を通じて寒川氏に兵糧が届けられており、同十一年正月、阿波方は三好氏を伴って安富氏を攻めている。このように、讃岐の豪族が阿波方を頼る姿勢が顕著になりつつあるのだが、最終的には仲介者である十河氏を介さなければ、阿波方に協力を要請することは不可能となっていった。

天文二十二年（1553年）、阿波の三好実休は遂に十河一存に命じて、讃岐の諸豪族が味方につくように勧告した。このとき、東讃の安富盛方、寒川政国は即座に服属している。さらに、書を遣わし香西元政を降伏させたことで、東讃は十河氏の支配下に収まった。三好氏による讃岐平定が容易に進んだのは、十河氏による活躍が大きいということの裏付けであろう。このとき従わなかった西讃の香川之景は、永禄元年（1558年）に三好実休の侵攻を受けており、その後降伏している。こうして、十河氏は本拠である東讃以外に、西讃にも影響力を及ぼし得ることとなった。

※香川県史を一部抜粋した上で補足説明を追加、筆者独自の考察で十河家の歴史を解釈。